

「研修会等名称」  
第 10 回 FD フォーラム

場所：同志社大学，  
キャンパスプラザ京都  
期間：2005 年 3 月 5，6 日

## 1. 研修の内容

「評価される大学教育」をテーマに，FD フォーラムが 3 月 5，6 日の 2 日間にわたって開催された。FD に関する研究会としては，その歴史，参加者などからみて日本有数のこのフォーラムは，今年で第 10 回目という記念すべき大会となった。

初日は同志社大学今出川キャンパスにおいて，まず，前軍縮会議日本政府代表部特命全権大使としてご活躍なされた上智大学法学部教授の猪口邦子氏の講演があり，その後，マスコミや大学で大学評価という問題に従事している 4 名の方々によるパネルディスカッションが開かれた。この中で感銘を受けたのは猪口氏の講演である。彼女は「21 世紀国際社会と日本の大学の使命」というテーマの中で，大学の役割，教育のあり方，これからの日本の進むべき道といった大きなテーマから，効果的な英語の指導方法や，講義を行う際の注意点といった個別問題に至るまで，ご自身の研究テーマを具体例として取り上げながら実に寒竹の深い議論を展開された。

2 日目は，キャンパスプラザ京都に場所を移し，それぞれのテーマに従って 8 つの分科会が開かれた。私が選んだのは第 4 分科会「高大の接点としての大学入試」である。ここでは，まずベネッセの木野内氏が「新学習指導要領」の中で困惑する高校生と高校教員の実情を報告し，その後，入学前教育に関して先進的な取り組みを行っている中央大学と広島修道大学の事例が報告された。もともと，私は入試委員として入試のあり方に関するテーマを選んだつもりだったが，この分科会ではむしろ「入学前教育」に重点が置かれており，そういう意味では，私の期待から若干はずれたものであったことは否めない。ただ，それはそれとして，その内容は大変興味深いものであった。というより，私があまり真剣に考えてこなかった問題にしっかりと取り組んでいる先生方の存在を知ることができ，また，その問題の重要性を改めて考え直す機会を得たという意味では，私の求めていたものよりも遙かに濃度の高い議論を拝聴できたと感じている。特に中央大学の取り組みは，今後の愛知大学においても大いに参考になるだろうと感じた次第である。

## 2. 研修の成果

これまでに何度か FD 関係の会議に出席させて頂いた。それらの経緯をふまえて考えると、FD の方向性に関する議論は、そろそろ行きつくところまで来ているように感じられる。これからは総論ではなく、各論、そしてノウハウの紹介などが議論の中心になるのだろう。そういう意味では、今回の猪口氏による授業の運営方法に関する講演、中央大学の入学前教育の紹介は大いに参考になった。

ただ、フォーラムの意義はそれだけには終わらない。授業運営に関して、我々教員は誰でも（程度の差はあれ）常に試行錯誤を繰り返しているが、一人で考えているだけではどうしても独善的になったり、狭い視野の中で考えたりしがちである。そのような過程の中で、船員的な取り組み、自分では考えもつかない発想に触れると、必ず何らかの刺激を受け、自分の視野が広がる感覚が発生する。短期的に結果が出るわけではないが、この刺激こそが、フォーラムに参加する最も大きな成果であると思われる。

## 3. 授業への研修成果の反映状況

今回、大いに参考になったのは、猪口氏の「教員の仕事は学生に教えることではありません。学生に学問の体系を見せること、そして本を読ませること、この2点です」という言葉である。猪口氏は学生に週 1000 ページの読書を義務づけているそうであるが、それに比べると私のやり方は足下にも及ばない。講義の内容や学生の質によって必ずしも同じ方法が望ましいとは言えないだろうが、参考にさせて頂くところは十分にある。

ところで、2. 研修の成果でも書いたように、フォーラム・研究会の成果というのは極めて長期的なものであると考えている。すぐに反映されるものはむしろ少ない。また、FD とは単に授業改善だけではないはずである。事実、今回私が最も刺激を受けたのは中央大学の事例で、入試、大学の制度、教員の姿勢などについて様々なアイデアをいただいた。そういう意味で、授業への反映に焦点を絞ったこの設問（3. 「授業への研修成果の反映状況」）はあまり適切ではないように感じられる。FD に関する議論はずいぶん深まっているはずなので、設問のあり方もそろそろ再考する必要があるのではないだろうか。

学部長	FD委員長	FD委員会	総合企画課長	係